横須賀水交会

【潜水艦隊司令官挨拶】

海将　竹中　信行

横須賀水交会員のみなさま、そして、縁あって本誌を手に取られたみなさま、もしよろしければ、「潜水艦隊のホームページ」をご覧ください。ご挨拶抜きのいきなりの宣伝で申し訳ありませんが、そこに「司令官挨拶」のコーナーがあります。現在の潜水艦隊の取組の方向性や司令官としての思いなどを掲載しています。ほぼ毎月更新しており、これまでの分もそこでご覧いただけます。

平均して月に一度の頻度で更新するのは少し骨が折れます。が、海幕の広報室長を務めた経験のある当司令部幕僚長の戸井将補から「一定間隔で積極的に更新・発信するように」とわりあいに強めに求められており、この「指導」に応えるべく、小まめに筆を執っているような次第です。

そのホームページの眼目は、① ひろく一般の方に潜水艦部隊のことを知ってもらうこと。② 水交会をはじめとする協力団体のみなさまに現状などを理解いただくこと。③ 潜水艦隊で勤務する隊員の家族や関係者の方に部隊のトップとしての私の考えや思いを伝えることの三点にあります。

みなさまの興味を引きたいこともあり、少しその内容に触れたいと思います。まず、昨年八月分では「着任の挨拶」として「服務の宣誓」を踏まえた上で部隊の実力向上に取り組むということを。続く九月分では「自衛官の心がまえ」に触れつつ「プロフェッショナル」としての隊員個々の努力の重要性について。また、十月分では潜水艦の「命名進水式」に関連する事柄と潜水艦の建造や修理に携わっておられる方々及びそのご家族への感謝の気持ちを述べています。

さらに、十二月分では潜水艦部隊の伝統行事ともいえる「クリスマス・ダイブ」について。明けて七年二月分では「潜水艦勤務の冬の一コマ（少しの弱音）」と今後の艦隊としての取組方針等について触れています。そして、翌三月分では自分が乗り組んでいる潜水艦への愛着や誇りについて…といった具合です。

このように、月ごとにその内容は異なります。が、そこに通底しているのは「潜水艦部隊の実力を高める」という私の思いです。

広島県の呉（くれ）市に所在する潜水

横須賀水交会主要行事予定

令和8年3月までの主要行事予定は、次のとおりです。なお、最新の情報は横須賀水交会ホームページHP(http://y-suikoukai.daa.jp/)で御確認下さい。

1　幹事会懇親会
（1）期日　12月12日（金）
（2）場所　メルキュールホテル横須賀

2　横須賀防衛団体共催賀詞交歓会
（1）期日　1月中旬
（2）場所　後日連絡

3　靖国神社月例参拝
（1）期日　2月19日（木）
（2）場所　靖国神社等

4　横須賀水交会防衛セミナー
（1）期日　3月上旬
（2）場所　後日連絡

（次頁へ）

艦教育訓練隊（略称：潜訓）の一階ロビーの正面には『我ら戦闘の用にあり』という潜水艦部隊の古くからのモットーが掲げられています。この『戦闘の用にあり』を体現するために、私は今まで以上に「実」ということにこだわっています。「実際、実効、実力」をはじめとする様々な「実」に正面から向き合ってそれをあらゆる取組の尺度とし、かつ、「時間」という「資源」ともいうべき要素を大切にしながら、覚悟をもって必要な施策を進めています。

今この時も百名を超える将来の潜水艦乗りたちが呉の潜訓で潜水艦の基礎を学んでいます。潜水艦の現場では二十歳前後の若者たちが一人前の潜水艦乗りになるべく努力を続けています。家族と離れて長期間の行動や修理に従事している千数百名の乗員たちがいますし、特別な忍耐力が求められる飽和潜水員たちや潜水艦救難艦の面々もそれぞれがプロフェッショナルとして己の持ち場で頑張っています。潜水艦に乗り組んで実地指導に当たる潜訓訓練科のベテランたちや陸上で教育に当たる潜訓の職員たちも愛情をもって後輩の育成に励んでいます。潜水艦の活動を支える潜水艦基地隊の職員や各司令部のメンバーたちも同様に熱意をもってそれぞれの仕事に取り組んでいます。申すまでもなく、これすべて日本国のため、精強な潜水艦部隊を作り上げるため、そして、それを次へと繋いでいくために。

横須賀水交会のみなさまには平素から大変お世話になっており心から感謝いたしております。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。また、今後とも潜水艦隊の活動に対するご理解を賜りますよう改めてお願い申し上げます。

【特別寄稿】

能登半島地震災害派遣での活動について

下　淳市

（横須賀水交会会員）

はじめに

令和６年１月１日、16時10分に発生した奥能登を震源とするマグニチュード7.6の地震は、震源地の石川県はもちろん、近隣富山県、新潟県及び福井県の元日のおだやかな午後を過ごす、北陸地域の人々の多くを被災者に変えた。

この地震は奥能登と呼ばれる能登半島北端が被災地の中心であり、同地域へのアクセス経路は少なく、人員・物資輸送が脆弱域であったこと、またこの地域は過疎化率や高齢化率が高めで、自宅を離れることが容易でない被災者が多かったことから、孤立地域や計画外少人数の避難場所が生ずることとなり、これまでの震災に比べ、当初の被災者の把握と避難・支援がより困難となった。

発災から１年以上が経ち、生活インフラ（電気、水道、ガスなど）は復旧し、自衛隊の災害派遣が終了した現在でも、避難所生活者が残り、また８万棟にも及んだ被害家屋の解体も容易に進まず、復興の困難さも際立つ震災となっている。

舞鶴地方隊においては、本震災の数年ほど前から、災害派遣には至らないものの、能登半島での近々の地震活動（２０２２年６月、２０２３年５月）に続く、新たな地震発生を警戒していた。このため本震災発生前の防災訓練や統合防災演習においては能登地域での地震発生時の情報収集・初動対処も演練しており、迅

速な初動対処要領については自信を持っていた。しかし、年始元日という風俗習慣上、人員・物資集積の最も難しい日の発災には様々な盲点があり、多くの教訓を得ることとなった。また自衛隊においても、２０１６年熊本地震以来の統合任務部隊編成での災害派遣となったが、現場での統合運用の難しさも実感し、多くの教訓を得ることができた。

今回横須賀水交会への特別寄稿に際し、寄稿者自身が海災部隊を指揮して得た数多くの教訓の中から、ロジスティックスに関連する成果と今後の課題を披露し、読者の災害対策に何らかの参考にと投稿する次第である。

災害派遣における成果

今回の舞鶴地方隊における海災部隊の活動は、海上自衛隊の全ての部隊の支援・協力を得て完遂することができた。地方総監を海災部隊指揮官とする限り、一地方隊の担任区で生じた災害であっても、現に警戒監視任務にあたる以外の海自のリソース全てを活用して長丁場の災害派遣に臨むことが今後の災害対処においても不可欠であると実感した。

また、本災害においては舞鶴地方隊以外の多くの派遣隊員が統合任務部隊司令部や海災部隊司令部の幕僚として、また現地対策本部や被災地での連絡・活動要員として献身的に活躍してくれた。

このように多くの海上自衛官が、運用及び後方の面から、災害派遣を実体験できたことは今後の海上自衛隊の活動にも貴重なレガシーとなった。

今後の課題

一つ目は地方隊の後方支援体制の見直しである。地方隊などの陸上部隊において、予兆のない地震などの災害派遣に対して365日・24時間、派遣部隊を迅速に出動させるための体制を確保できているか再検討してみる必要がある。港務隊のえい船部隊は24時間待機させているが、燃料は搭載が可能か。あるいは造補所は必要な糧食を直ちに準備、搭載できる態勢を維持しているか、契約業者が休業期間であっても必要な資材を調達する腹案を有しているか。いかなる事態にも即応できてこそ、我々自衛隊が国民に我が国の安全を負託される要件であろう。

二つ目は災害派遣発動の補給拠点の確保である。災害態様、港湾施設の規模、集積地からの地上交通の利便性により使用に耐えうる港湾は限られているが、補給拠点の有無は派遣兵力の大小、そのローテーション期間にも大きく関わる。各地方隊は海災部隊に指定される災害に備え、担任地域の補給拠点候補地を事前調査し、物資集積地から地上輸送・搭載手段の確保など統合レベルで実地演練しておくことが望ましい。

三つ目は、地方自治体からの支援物資の融通である。地方自治体は災害に備えそれぞれに物資を備蓄しており、被災する恐れのない自治体からの備蓄物資を災害派遣部隊として譲り受け、艦船・航空機など自衛隊の輸送力を利用し、いち早く被災地に輸送することは、今回の事例を見ても可能であり、被災自治体による支援物資の管理体制が整うまでは、自衛隊が率先して輸送することが効果的である。各地方隊が近傍自治体と事前取決めを結ぶことが現実的だが、将来的には自衛隊が自治体から融通された物資を、政府として各自治体に補填するシステムを構築するよう省として取り組むことが望ましい。

最後に現地活動要員の休養である。海上自衛隊に限らず、被災現場で活動する隊員は支援活動での疲労の蓄積が大きいことが改めて強く感じられた。身体的な疲労に加え、被災者の目前で活動する精神的な緊張もあり、日々疲労の蓄積は想定以上と感じられ、長期の災害派遣に耐えるには、隊員の適切な交代ローテーションに加え、日々の疲労を蓄積させない現地での安定的な休養態勢を確立する必要がある。被災地での隊員の活動環境は被災者の手前、待遇を良くできないといった抑制が働きがち

だが、被災者支援を行う隊員の休養を適切に行う必要があることに疑問の余地はなく、過度なものでなければ理解は得られるはずである。今回「なっちゃんワールド」や「はくおう」といったＰＦＩ船舶は、被災民支援や官公庁職員支援のために投入されたが、今後の派遣では、これらを被災地で活動する自衛隊員の宿泊待機・給養のために速やかに派遣することも一策ではないかと考える。

【特別寄稿】

硫黄島遺骨収集事業（後篇）

前島　倫子

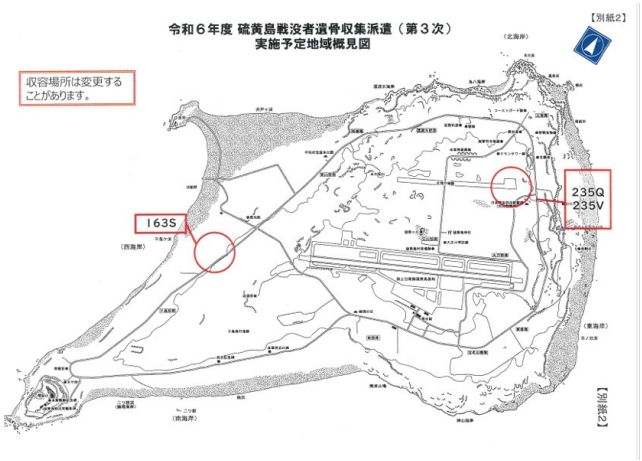
（浜松つばさ会会員）

235 Ｑ-１地点

鉄兜、ガスマスク、万年筆、腕時計、ボタン、水筒など遺品も一緒に収容できた地点です。

２柱を収容することができました。

全身骨でありませんでしたが、かなりのご遺骨数を収容できたと思います。特に鉄兜の中から、頭頂骨や鼻骨、下顎骨を崩さないようそっととりだすことができたのは印象に残りました。



硫黄島では、「歯」は良く収容する遺骨の一つですが、内地に比べ非常に脆い印象です。遺骨の中でも特に丈夫な部位のはずですが、フルイがけや洗骨の際、歯根とエナメル質が砕けてしまうことがありました。硫黄島の環境（土壌？水質？）は遺骨の風化と劣化をこれだけ早めてしまうのだ、と実感しました。

(下)水筒　(上)鉄兜

不発弾

235 Ｑ-１からは、陶器製手榴弾の完品が３個発見されました。（私も一つ掘り出しました）。完品は内地では珍しいのですが、硫黄島では珍しくもないとのこと。また6.5ｍｍ、7.9ｍｍの実包が複数発見されたことで、少なくとも九九式、三八式火器が使用されていたことになります。更に、15メートル程の距離には「米軍14インチ不発弾」があり立ち入り禁止区域となっていました。※ライフリング幅から間違いなく米軍戦闘艦から発射された不発弾。陸上自衛官、通称「爆弾さん」がその場で鑑定してくれました。法医人類学者である骨のスペシャリスト、通称「せんせい」曰く、ご遺骨の状況から戦闘負傷による死亡は間違いなく、ご遺骨の部位、数から日本兵２柱でほぼ間違いない。とのことでした。「２柱」であるといえるのは、実包が「２種類」であること。ＤＮＡ鑑定の前に日本人の遺骨であると推測できるのは「打ち込まれた米軍艦砲」が近隣にあること、他日本製の日用品多数であること、なのだそうです。周辺状況などからも推察を進めることも多いそうで、ボタン一つ見落とせないと、非常に勉強になりました。

最後に

今回の第３次派遣では、22柱のご遺骨を収容することができ、令和５年度派遣の11柱と合わせて、33柱を内地へ返還、千鳥ヶ淵で厚生労働省へ引き渡しを完了いたしました。

硫黄島では、遺児（遺族会）の方や旧島民の会の方に色々なお話しを伺う機会を得ました。一緒に収容作業をすることもでき、皆さんのご年齢を考えても、非常に貴重な時間であったと思います。

実際、収容作業をしながら、ご

遺骨の劣化が進むので、スピード重視。早く作業を進めた方がよいのか、破片一つこぼさない様、より丁寧に作業を進めたらよいのか、迷う場面が多々ありました。

全作業を通して、丁寧さを重視する傾向だったと思いますが、島内のブルーシートの多さや、5日程降った雨（スコール）、それによる地表面の土砂流出の様子を見てしまうと、この作業スピードでよいのかと疑問を持ってしまいます。観光気分で上陸してよい場所だとは思いませんが、「遺骨収集事業」がもっと多くの人に知られ、事業参加のハードルがもう少し低くなれば良いと感じました。

最後になりましたが、今派遣では、非常に多くの方にお世話になりました。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

令和7年2月13日現在

硫黄島　戦没者数　21,900名

収容遺骨概数　10,750柱

【横須賀散歩】

「陸軍桟橋／船番所跡」

火猿

浦賀港の玄関口に、昭和10年に造られた通称「陸軍桟橋」があります。

太平洋戦争終結後に浦賀は引揚指定港の一つとなり、中部太平洋や南方諸地域、中国大陸等から56万余の帰国者を受け入れました。昭和22年の5月、浦賀引揚援護局の閉鎖で、この地の引揚業務は幕を閉じました。

この場所は、もともと享保6年に浦賀奉行所の主要機関である船番所が置かれた処で、江戸へ出入りする船の人と荷物を検査する「船改め」が行われた海の関所でした。当時の浦賀は、とても繁栄していたそうです。

摺鉢山頂上慰霊碑

陸軍桟橋／船版所跡

【活動記録】

船番所跡の説明板

1　掃海艦「のうみ」の引渡式・自衛艦旗授与式

令和７年３月12日（水）、掃海艦「のうみ」の引渡式・自衛艦旗授与式が春を予感させる小糠雨の中、ジャパンマリンユナイテッド株式会社横浜事業所鶴見工場で執り行われました。

本艦は「あわじ」型４番艦として令和５年10月24日に進水式を行い、「のうみ」と命名されました。

「のうみ」の艦名由来は、広島県厳島南東、江田島と地峡でつながる東能美島、西能美島を合した呼称を艦名としました。

呼称は「のみ」、水路図誌にも「のみ」と記していますが、地元での現代呼称に従い「のうみ」を採用しています。

海上自衛隊としては初めて命名される艦名で、日本海軍では海防艦「御蔵」型の同じく４番艦の「能美」が初代になります。

本艦の仕様・装備は「えたじま」との差異はなく、ＦＲＰ製掃海艦艇として７隻目、今日ではＪＭＵが国内では唯一掃海艦艇を建造していますが、前身の日立造船、日本鋼管で建造した木造掃海艦艇から数えて「のうみ」は117隻目となります。

式典では、本田　太郎　防衛副大臣、齋藤　聡　海上幕僚長をはじめ、防衛省及び建造所関係者等多数の参列者を得て、厳粛に行われました。

はじめに建造所から防衛省へ引渡しが行われ、後に本田防衛副大臣から自衛艦旗が「のうみ」艦長に厳かに授与されました。

引き続き自衛艦旗を捧げた副長を先頭に乗組員が乗艦し、後部甲板に整列、国歌の演奏とともに自衛艦旗が掲揚されました。

ここに掃海艦「のうみ」が就役し、掃海隊群、第３掃海隊に編入されました。

続く祝賀会での祝辞において本田防衛副大臣は「我が国を取り巻く安全保障環境が戦後最も厳しく複雑なものとなる中、艦船の安全な航行の確保に大きく寄与する掃海隊の艦艇にかかる安定的かつ中長期的な維持整備のために、艦船の建造修理基盤を高い水準で維持することが極めて重要であると認識している」と語られました。

その期待に応えるべく「のうみ」は多くの式典参加者、ＪＭＵ鶴見工場の社員に見送られる中、配備先の呉に向かって決然と堂々、出港していきました。

（勝目　純也　幹事　記）

2　横須賀教育隊修業式において激励賞を贈呈

横須賀水交会（会長：松下　泰士）では、令和７年３月24日（月）横須賀教育隊での修業式に参列し、会長が激励賞を授与しました。

横須賀水交会から第142期初任海曹課程（50名）、成績優秀者１名に、横須賀防衛協会から18期海曹予定者課程（164名）、成績優秀者１名に表彰状及び記念品を

贈呈しました。

大賀教育隊司令から「教育期間中の日々の努力に敬意を表するとともに目標達成に向けた自己研鑽の体験を生かし成長を続け、海上自衛隊の中核となれとの励ましが送られました。また、今後は国を守る仲間として笑顔で再開するのを楽しみにしている。」と付け加えられました。

当日は、春を思わせる穏やかな日和の中修業式が実施され、各課程の学生ははつらつと行進し部隊へ巣立っていきました。

今回、以下の方が表彰されました。

第142期初任海曹課程

３等海曹　安藤　真美（あんどう　まみ）

今後は部隊において更なる研鑽を積まれ、海の防人として大きく成長されることを横須賀水交会一同祈念するとともにこのような活動が次世代を担う海上自衛官及び参列のご家族の皆様に対して水交会の理解の一助となれば幸いです。

（吉岡　俊一　幹事　記）

３　「浜空鎮魂の碑」慰霊祭

令和７年４月６日（日）午前、満開の桜で賑わう横浜市金沢区富岡総合公園内の浜空神社跡において、「浜空鎮魂の碑」慰霊祭が浜空会（事務局長　加藤郁夫様）主催で執り行われました。

慰霊祭は、軍艦旗掲揚の後、雷（いかづち）神社宮司により、修祓の儀、黙祷、献饌の儀、玉串奉奠、撤饌の儀が斎行されました。

この鎮魂の碑は、昭和11年10月1日に開設された横浜海軍航空隊の鎮護の社として造営された浜空神社（平成12年、雷神社境内に遷移）跡地に建立されたものです。

慰霊祭には、ご遺族をはじめ、全国ソロモン会会員の方々、黒川勝、高橋徳美両横浜市議会議員、防衛省から自衛艦隊先任伍長 清水曹長、横須賀地方隊先任伍長 百武曹長、第４航空群先任伍長 美濃曹長、横須賀上級海曹会会長 酒井曹長ほかが参列、横須賀水交会からは、佃、長崎、加藤各顧問ほか約10名の会員が参列、このほか、毎月、浜空神社跡地周辺の清掃にご奉仕されている浜空会有志掃除会の方々を合わせて約50名の方々が参列されました。

今年は、幼い頃に母親に連れられて浜空神社に何度もお参りしたことがあるという御婦人によるハープの演奏が玉串奉奠の間行われ、慰霊祭をさらに厳かなものにしました。

慰霊祭後の集合写真のあとに計画されていた直会（なおらい）は、雨が強くなったため、残念ながら取り止めになりましたが、参列者は、天気とは逆に清々しく晴れやかな気持ちで浜空神社跡地を後にしました。

（一瀬　良文　事務局長　記）

４　「海軍の碑」記念行事

令和7年5月27日（火）、毎年海軍の日に実施している「海軍の碑」記念行事が横須賀ヴェルニー公園において、厳粛に執り行われました。

この日はくもりの天気で過ごしやすく、例年参加者で行う事前清掃では集合時間の前に多くの人が集まり、予定よりも早く清掃が終わりました。

「海軍の碑」は、平成7年に全国の海軍関係者及び有志の皆様からの浄財により建立され、爾来横須賀水交会が慰霊顕彰行事を継続してきました。

記念行事は、ラッパ「君が代」の伴奏による国旗及び自衛艦旗の掲揚に始まり、海軍戦没者の英霊に対しての黙とう、「海軍の碑」建立の趣旨の説明、鎮魂の譜の傾聴という流れで行われました。

その後、松下泰士 横須賀水交会会長から挨拶があり、「戦後80年間、日本に戦争が起きなかったのは、激烈なる戦闘を戦い抜いた英霊のお陰であり、その御霊にあらためて尊崇の念をもって感謝の誠を捧げる次第です。」との話がありました。

併せて、会長から海軍の碑は建立から約30年を経てひび割れなど傷みが見られるようになったので、修復のための検討を本年度進めたい旨の意見表明がなされました。

最後に、全員で記念撮影を行ったあと、会員のご厚意による御神酒をいただき、海軍の英霊の追悼と永遠の平和を誓い、行事終了後、参加者の一部は、記念艦「三笠」で行われる日本海海戦120周年記念式典へと向かわれました。

（川上　雅永　幹事　記）

5　部隊研修・練習艦隊体験航海

令和7年6月3日（火）、練習艦「かしま」、「しまかぜ」による練習艦隊体験航海が行われました。

体験航海には、乗員家族のほか、他省庁や自衛隊協力団体等の方々が参加されていました。

横須賀水交会も、横須賀地方総監部からの案内を受け、部隊研修として会員の皆様に呼び掛けたところ、早朝集合の案内にもかかわらず53名の希望者があり、松下会長とともに参加しました。

一行は、横須賀地方総監部正門付近で集合した後、総監部の隊員に引率され、「かしま」に乗艦しました。

舷門では乗員や実習幹部の方々が乗艦者ひとりひとりに声を掛け温かく迎えてくださいました。

今回の体験航海は、横須賀（逸見岸壁）から東京国際クルーズターミナル（東京都江東区青海）に至るコースで実施され、一旦、実習員講堂または食堂に案内された後、各々が自由に艦内を見て回っていました。

当日は、あいにくの雨天でしたが、会員皆様の服装は万全で、雨なにするものぞの意欲が溢れていました。

また、艦側では雨でも楽しんで貰えるよう要所に乗員や実習幹部が配置に就かれ、笑顔で艦内の紹介や丁寧に案内されていました。

そして、実習員講堂では、昨年の遠洋練習航海の様子がビデオ放映され、食堂では、ポップコーンや綿菓子が、振る舞われるなど、様々な工夫が凝らされていました。

入港後は舷門での見送りに加え、雨衣を着た実習幹部の方々が岸壁にて、「本日はどうもありがとうございました。気をつけてお帰りください。」との心のこもった挨拶に、清々しい気分で帰路につきました。

部隊研修参加者には体験航海を通じて海上自衛隊の活動の一端を垣間（かいま）見ていただき、ご理解を深めていただいたものと思います。

多忙な中にもかかわらず、本体験航海を行っていただいた海上自衛隊の皆様に感謝するとともに、遠洋練習航海でのご安航をお祈りします。

（山岡　鉄司　幹事　記）

６　定期総会、講演会及び懇親会

令和７年６月５日（木）、横須賀水交会「令和７年度定期総会、講演会及び懇親会」が、横須賀商工会議所において開催されました。

総会は、出席者65名、書面での回答370名分を得て、次の３つの議案について審議が行われ、いずれも賛成多数で可決されました。

第１号議案：令和６年度活動報告、令和６年度収支決算報告及び監査結果報告

第２号議案：令和７年度役員候補者

第３号議案：令和７年度活動計画、令和７年度収支予算

一般討議・提案では、有志会員から横須賀防衛セミナーには人数の制限事項を設けず、海上自衛隊に関する基本的な話題を幅広く関心のある方に聞いてもらった方が良いことと、YouTubeやTiktokなどの動画で若い方にアピールし、関心をもってもらうべきとの建設的な意見が出され、様々な制約や能力不足が挙げられるが努力していくとされました。

次に、司会の在原総務幹事から今年春の叙勲者、新入会員、新役員の紹介があり、出席された方に拍手が送られました。

そして、河野水交会理事長からの祝辞を在原総務幹事が代読し、川上総務幹事が「令和７年度の主な行動等予定」を説明して、総会は閉会となりました。

総会に引き続き「自衛艦隊の活動状況」と題して、自衛艦隊司令官　大町　克士　海将による講演が行われました。

冒頭に、昨日までジブチに出張されていたことを引き合いに、米国のみならずヨーロッパ諸国や東南アジア各国の海軍高官の来訪が相次いでいることや多国籍訓練を中心とした海外訓練の質・量が飛躍的に増加している

説明がありました。また、数多く生起した事故を教訓として「よりＳ２（精強、誠実）」を旗印に掲げ、隊員の意識改革や組織改編に努力を傾注していることのほか、新装備品の紹介、人事施策に至るまで多岐にわたる話題を網羅的にお話いただき、数多くの質問にも講演時間を延長して丁寧に回答いただきました。

講演後の懇親会では、松下会長の挨拶にはじまり、来賓を代表して、上地　克明　横須賀市長と大町　自衛艦隊司令官の力強い祝辞を頂戴しました。引き続き、小泉　進次郎　衆議院議員代理秘書、浅尾　慶一郎、佐藤まさひさ、三浦　のぶひろ　各参議院議員代理秘書、亀井　たかつぐ、田中　洋次郎　両神奈川県議会議員、加藤　眞道　横須賀市議会議長、大野　忠之横須賀市議会議員、杉本　正彦水交会会長、山本　高英　東京水交会会長、眞木　信政　湘南水交会会長、井上　力　三笠保存会理事長をはじめとする防衛関係諸団体の会長等のほか、潜水艦隊司令官　竹中　信行　海将、護衛艦隊司令部幕僚長　清水徹　海将補、海上自衛隊第２術科学校長　藤井　健一　海将補以下各部隊指揮官等が来賓として紹介されました。祝電披露の後、竹中潜水艦隊司令官のユーモアあふれる乾杯の発声で開演となりました。

その後は、会員相互で旧交を温めたり、来賓の現役自衛官と談笑したり、記念撮影を行うなど、終始賑やかでともすれば喧騒に近い雰囲気となり、瞬く間に閉会の時間を迎えました。

最後に、横須賀上級海曹会会長　酒井　一　海曹長による地元の山形県に伝わる「ハァ、ヤッショ、マカショ」の掛け声に続く、手拍子３回のユニークで楽しい中締めでお開きとなりました。

（田村　久幸　幹事　記）

７　「家族支援に関する覚書」調印式

令和７年６月27日（金）、横須賀地方総監部会議室において、横須賀地方総監部管理部長三好　昇次　１等海佐と水交会横須賀支部　松下　泰士　会長との間で「家族支援に関する覚書」の調印式を実施しました。

従前締結していた覚書の内容を、海上自衛隊の行動等に伴う緊急呼集に際し、水交会会員宅に隊員子弟を一時的に預かるという方式から横須賀地方総監部の一時預かり場所に子弟を見守るために会員を派出するという方式に、また、ファミリーサポートセンターの呼称を家族支援センターに変更したものです。

本件は、いつ起きるかもしれない家族支援が必要な事態への対応について、できるだけ早く支援できる体制をとる必要があるとの思いで準備を進めてきたものです。

覚書の骨子について紹介します。

横須賀地方総監部と水交会横須賀支部は、海上自衛隊の家族支援について、次のとおり合意した。

１　海上自衛隊の行動等に伴う緊急呼集に際し、水交会横須賀支部は横須賀地方総監部が設置する児童一時預かり所に指定する水交会会員を派出する。

２　水交会横須賀支部は、この支援を行うために家族支援センターを設置する。

３　横須賀地方総監部は、水交会横須賀支部が設置する家族支援センターの運営を支援する。

４　水交会横須賀支部は、家族支援センターによる横須賀地方

総監部との調整を通じて水交会会員を派出するものとし、派出された水交会会員は横須賀地方総監部の監督下で所要の家族支援を行う。家族支援センターの運営については、水交会横須賀支部家族支援運営要領による。

水交会横須賀支部家族支援運営要領を含む覚書全文については、水交会横須賀支部ホームページをご覧ください。

調印式終了後、三好管理部長及び松下会長から今回の覚書の作成に尽力した関係者に感謝が伝えられ、当該家族支援に加え、隊員募集や広報についても幅広い意見交換が行われました。

横須賀水交会会員で派出会員を希望する、質問事項がある、または、詳しい内容を聞きたいなどのご要望がございましたら、関 担当幹事（family-support@y-suikoukai.sakura.ne.jp）までご連絡ください。

会員皆様の積極的な参加をお待ちしております。

（山岡　鉄司　幹事　記）

８　横須賀教育隊修業式において激励賞を贈呈

横須賀水交会（会長：松下泰士）では８月26日（火）横須賀教育隊第23期一般海曹候補生課程、第387期練習員課程及び第73期練習員（女性）課程の修業式において、成績優秀者４名（男性２名、女性２名）に対し、表彰状及び記念品を贈呈しました。

第23期一般海曹候補生課程486名から男女各１名、及び第387期練習員課程103名び第73期練習員（女性）課程40名から各１名が選考されました。

式典は、修業生約600名、ご家族等約１４００名の参加となり、陸上自衛隊武山駐屯地体育館を借用しての式典となりました。

当日は酷暑でありましたが体育館に冷房機が設置されており式典は予定どおり実施されました。

式典において大賀司令からは、修業生に対し５カ月間におよぶ慣れない団体生活と各種の教育訓練への不安を乗り越え修業を迎えた努力をたたえ、『「精強」とは事に臨んで職務を完遂し国民から信頼を得ることであり、辛く苦しいことが多いが一人ひとりの強さが部隊の強さであり、謙虚で素直に堂々と失敗し少しづつ失敗をなくして成長せよ。今後は同じ海上自衛官として笑顔で再会しよう。』との式辞がありました。

真殿総監からは、修業生に対し、「海自を代表して祝意を示すとともに今後は部隊の一員として若さと活力の源となることを期待している。同期は真の仲間、一生の財産であり令和の海上自衛隊の要として実直さを追求し、国を守る気概を持って任務を遂行せよ。」との訓示がありました。

また、来賓祝辞では田中市長特別顧問が上地市長からの祝辞を代読され、「周辺の警戒監視はもとより昨年の能登半島地震のような自然災害でも国民の生命財産を守る活動に従事され、国民が最も信頼を寄せているのは自衛隊である。戦後80年を迎え平和国家としての歩みを続けているがこれを未来につなげていかなければならない、当地横須賀は戦前から海軍との深い結びつきがあり、皆さんにも第２の故郷として横須賀寄航等の際には横須賀の街を楽しんでください。」との話がありました。

激励賞は、以下の方々が授賞

されました。

第23期一般海曹候補生課程

１等海士　吉田　慎之介（よしだ　しんのすけ）

２等海士　倉橋　穂奈美（くらはし　ほなみ）

第387期練習員課程

２等海士　山本　貴久（やまもと　たかひさ）

第73期練習員（女性）課程

２等海士　佐藤　逢姫（さとう　はるき）

（吉岡　俊一　幹事　記）

【お知らせ】

寄付のお知らせ

寄付芳名（敬称略）

奥村直広　１０，０００円

横須賀水交会に対するご芳志まことに有難うございました。

（一瀬　良文　事務局長　記）

横須賀水交会 全会員用

メーリングストについて

「メールによる 会員の皆様への行事等のご案内」を行っています。既に、多くの会員の方には登録していただいていますが、最近の水交会活動の活性化に伴い、メールでの連絡を更に有効活用しています。特に、体験航海や艦艇の出入港を伴う行事では、当日の天候により時間や場所が変更になった場合、横須賀水交会からタイムリーにご連絡させていただけますし、また、お問い合わせいただくこともできます。

つきましては、メーリングリストへの登録を希望される方は次の要領でご登録 をお願いいたします。

① 登録用アドレス

memberlist_regist@y-suikoukai.sakura.ne.jp

② 登録内容

（例）

（1）氏 名：海尾 護

（2）会員番号：0174183

（3）メールアドレス

umiomamoru@gmail.com

※ 登録アドレスは、お一人につき1アドレスとさせていただきます。何かご不明な点がございましたら、登録アドレスへご一報ください 。以上、よろしくお願いいたします。

（檜森　晃治　幹事　記）

叙勲について

次の会員の方が叙勲を受けられました。（敬称略）

令和7年春の叙勲者

瑞宝小綬章　荒井 眞一郎

（桂　眞彦　幹事　記）

訃　報

次の会員の方が逝去されました。（本年4月1日～9月30日受付）（敬称略）

寺澤　英三（4月27日）

廣田　政治（7月31日）

香川　亮（9月10日）

（一瀬　良文　事務局長　記）

新(編)入会員について

次の方々が横須賀水交会に新たに入会（編入）されました。（敬称略）

令和7年3月～令和7年9月

編　入

有山 一成（有志）、桑原 清純（有志）

入　会

真角　和美（有志）、稲向 智文（有志）、魚住 真理（有志）、中野 由久（有志）、銀田 みゆき（有志）、大西 うらら（有志）、森 敏弘（有志）、横尾 美香（有志）、石原 敬浩（82幹候）、江成 雅子（有志）、濱野 裕史（有志）山本 好人（生徒33）、北川 正代（76幹候）、杉本 真央（有志）

（桂　眞彦　幹事　記）

【編集後記】

異例尽くしの暑さが続いた分、一気に秋の深まりを感じます。充実した短い秋を楽しみましょう。